



◇ 今回は、第8回「さくら塾」（清長豊先生）の報告です。

日時： 平成29年11月9日（木） 16：40～17：50
講師： 清長豊氏（NPO法人アジャスト代表、岐阜県公立小学校教員）
演題： 特別でない「特別」支援教育 ～多様な子どもたちと関わって～
参加者： 希望者36名

発達障がいのある子どもたちや外国籍の子どもたち。家庭や学校現場での現状を踏まえつつ、子どもや保護者への支援の在り方について、清長豊先生からうかがいました。セミナー終了後も、先生のもとに熱心な生徒が集まり、質疑応答が続けられました。



生徒の感想

■今日は清長先生の話をお聞かせいただき、発達障がいのある子どもや外国人の子どもとの関わり方について考えることができました。その中で特に印象に残っているのは、発達障がいのある子にはその子にあった学習のスタイルをさせること、外国人の子にはやさしい日本語を使って接することで、より生活しやすい環境をつくれるということです。

清長先生がお話しされていたように、互いの価値観を理解し、尊重し、自由な学習、生活を提供できるような社会を目指していくことが大切だと思いました。そして今日の講話で学んだことを生かして、これからは多文化共生に貢献できるような接し方を自分もしていきたいと思いました。

■見た目では分からず、一見普通の子もだとしても発達障がいであるかもしれず、こちらが良かれと思ってやったことが、相手を困らせるかもしれない。そう感じ、もっと発達障がいへの理解を深めなければならないと思いました。また、発達障がいだとしても理解や対応を工夫すればのびしろはたくさんあり、一般的な教育の枠に当てはめずに、柔軟に個々に合わせた学びが必要であると分かりました。また、周りの大人の理解に加え、同時に子どもの理解も深めていくことの必要ではないかと思いました。

■日本は「人と違う」ことに対して少し厳しいと感じることが今までもあったけれど、今日の講座を聞いてさらに実感を伴って感じられた。障がいがあることや、親の母語が違うことで生きづらさを感じている子ども、その親に寄り添って、「人と違って全然いい」と言える、思える人が学校の先生などという職業に限らず増えるといいと思う。

海外の国では「障がい=you are special」という考え方があったので、発達障がいに限らず、様々な考え方、生き立ち、人種などそれぞれ全てが特別であり、普通であるという考え方を自分自身ができるように、色々な人と関わって、自分の心を豊かにしたいと感じた。将来、教育にも関わる職業に着こうと思っているので、困っている子供だけでなく、その家族や担任などの先生、地域の人々の悩みに寄り添って、みんなで理解し合える教育体制を作る手助けがしたい。

■今日、清長先生は教育の立場から話されていましたが、私は看護だったらどうだろうと思って聞いていました。そんな中で清長先生が「子どもだけでなく、そのお母さんも支援する」と言われたときに、これは看護にも共通することだと思いました。患者さんだけをケアするのではなく、その家族の方も支えていく。病気で苦しいのはもちろん患者さん自身のなのですが、それを支えている家族にも悩みや苦しみがある。そう思ったときに家族全体のことも考えていける、そんな人になりたいと思いました。学校の養護教諭でもそうだと思います。その生徒自身だけでなく周りの環境やその子の家族、または友達のことまで目を配れる養護教諭を目指したいです。今回話を聞かさせていただいて自分の考えが広がりました。改めて、色々な話を聞いたり自分なりに考えたりすることが大切だということを学べた気がします。

■私は将来子どもと関わる仕事がしたいので、何か学ぶことができたらいいなと思って今日は参加させていただきました。発達障がいの子もや、外国の子もと関わることは簡単なことではないけれど、相手の気持ちをしっかり理解して子どもたちにとって一番良い勉強方法などを考えていきたいと思いました。自分の弟がADHDなので、どうサポートしてあげたらいいかということも聞くことが出来て本当に助かりました。今日学んだことをこれから生かしていきたいです。

■今日の講演で、発達障がいは誰にでもありうる特徴だということを知りました。日本と海外では特別支援教育を受ける人の定義が違い、日本にはほかの人とはちがう特徴を持って、うまくコミュニケーションをとることができない人がたくさんいて、そのなかでもその違いを認めてもらえない人がいると分かりました。その人たちのために私たちができることは、その障がいや違いを理解しようとし、一緒に考えることだと思いました。また、国際化が進んで、外国人や日本語がわからない人が増えているので、「やさしい日本語」を使うことは日本語が苦手な人も住みやすくするためにはとても大切なことだと思いました。発達障がいのある人や日本語がわからない人、誰もが住みやすい日本を作るために、自分との違いを理解し、受け入れ、コミュニケーションをとれる人になりたいです。

■私は以前から、発達障がいについて関心があったのでそれに関する本を読んでいました。今回、実際に活動している方から話を聞くことができるとても有意義なものになったと思います。発達障がいの方に対して、「障がい」というレッテルを貼ってしまうのではなく、私たちが苦手なことがあるのと同じように対人関係や落ち着いて人の話を聞くのが苦手なのだという認識をもつこと

が大切だと思いました。

また、発達障がいや外国に繋がる子どもたちを支援する上でさまざまな人と人との連携が重要だと気づきました。それは、親子間だけでなく、夫婦や近所の人、学校の先生、友達、その友達の親といった人たちの連携だと思います。子供を押さえつけて周囲に馴染ませようとするのではなく、周りが適応しやすい環境を作ってあげなくてはならないことや、わからないことは本人に直接聞いて、そうすることで対策を考えるきっかけになるということが分かりました。

■障がいのある子たちも、外国人の子たちも、他人には理解してもらえない特徴や現状を抱えていることが分かった。特に、ADHD の子の特徴はその子の性格が「おかしい」と判断されたり、「ふざけている」とみなされたりしてしまうと感じた。こういう子たちにはみんなと同じようなペースに無理に合わせるのではなく、その子に合った接し方をしていくべきだと思った。また、私たちはその特徴を悲観的に見る姿勢があるので、海外のような *you are special* という発想を持っていたいと思った。

■今回は貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました。講演会の中で印象に残った言葉がありました。「発達障がいの子どもたちが増えたのではなく、世の中が変わったのだ。快適さに慣れすぎて耐性がなくなってしまったのだ」とあり、確かにその通りだと思いました。発達障がいとは言っても、決してできないのではなく、時間がかかってしまうからできないとみなされてしまうのがすごく残念です。集中力がないとか、さぼりがちになってしまうのは、その子の性格なのではなく、生まれもったものでもあるのだと知り、認識の仕方が少し変わりました。「特別」だと言われる子たちと、自分たちの違いは何だろうと考えてみると、実はそこまで大差ないのではないかなと思いました。私たちはみんなそれぞれがちがうからこそ、その個性を認め合うことが大切なのだ改めて痛感するよい機会となりました。これからの人生の中で、この考え方を大切にしていきたいです。

■母が特別支援に関する仕事をしているので、関心があったため参加させていただきましたが、具体例が多くわかりやすいお話の中で、たくさん学びがありました。

特に、障がいがある子への支援ではなく、外国につながる子どもたちへの支援という話をはじめて聞きましたし、そこに焦点を当てたこともありませんでした。日常生活の中で外国の方を目にすることは多いのに全く考えたこともありませんでした。今までの社会や教育現場の中で、目に見えて支援が必要である子どもたちではなく、時代が変化するにつれて新たに生まれた支援を必要としている子どもたち。彼らのための支援の方法は多種多様にわたりますが、ひとりひとりに合う方法を見つけ出すことがまず難しいと思います。そのとき、アジャストのように子どもだけでなく親も先生も助けてくれる人がいたらどれだけ助けになるだろうと思いました。

この話を聞くことができてよかったと思いました。ありがとうございました。